

会場を単なるメーカーのPRの場としたのでは今後も失敗に終るであろう。みごとなサーモグラムが得られる試料をセットし、単にデモンストレーションを行なうだけでは参加者にとってあまり役に立たない。むしろ参加者が持参した難物の試料の熱分析を各人にやらせ、その上で問題点をメーカーや講師側と議論することが有意義である。時間的な制約もあるが今後の企画上の努力目標としたい。

第2は講師陣の若返りの問題である。過去を含め全16回の講習会の講師陣は、多少の出入りはあるがほぼ常連となっている。これには理由がある。熱分析機器の進歩は著しく、初期のプリミティブな市販品や手作りの装置から現在の自動化されたハイパフォーマンス機器までの歴史をともに生きてきた世代が講師陣を引き受けているのであって、コンピュータ化された機器のみに慣れ親しんできた若い世代よりは経験が深いことになっている。

第5回熱測定ワークショップ 『新材料開発における熱分析—その最前線—』報告

(世話役) 十 時 稔(東レリサーチセ)

去る7月13日、表題のワークショップが、当学会の作業グループの一つである熱測定応用研究グループの活動の一環として京大会館で行なわれた。過去4回は、いずれも熱分析講習会に続く3日目に行なわれていたものであったが、今回は講習会に先立つ1日目に開催された。初心者中心の講習会の方をなるべく京都祇園祭りのクライマックス(16日の宵山と17日の山鉾巡行)に近づけたとの幹事側の粋な計らいのためと拝察している。

それはさておき、今回、新材料をテーマにとの企画幹事の意向にしたがって私が世話役をお引き受けしたのは、新材料開発に果している熱分析の役割について、その道の第一線の研究者のお話しを一度本音ベースで伺えたら、との平素からの個人的想いのためであった。趣意書にも記したごとく、異常とも思えるような昨今の新材料開発ブームに加えて、セラミックス超伝導体の出現はこれに油を注いだような事態を招き、私のようなある程度の実務経験はあっても、基礎力の無い現場の熱分析関係者は、幸せ感と戸惑い感とを合せ持っているのではないか、こういった方々と一緒にお話しが聴け、お互いが自由に議論できたら、との勝手な仲間意識が行動に走らせたともいえよう。今回のワークショップを熱測定応用研究グループの活動の一環として捉えたのも、このような応用仲間意識が背景にあったからである。

しかし会員数750名を擁するまでに成長した日本熱測定学会の実力と将来を思えば、ここで若い世代を講師陣にどんどん採用し、新たな発展の契機にしたいところである。これ迄の講師陣はそれぞれの分野のベテランなので、企画する側としては安心してお願いできたわけである。安心してまかせられる立派な後継者を育てることは学会の急務である。

今回の講習会会場確保に御尽力いただいた近藤前会長、企画担当された脇原氏と市原氏、展示と実演に御協力いただいたメーカー8社の方々、ならびに運営に当たられた学会事務局の方々に深く感謝したい。筆者は企画幹事1年目なので今回は見習いであり、次回からの企画に参画することになっている。今後共、より一層の御協力をお願い申し上げる次第である。

さて、プログラムの内容であるが、“現場からの一つの経験論”と題した私の座席的な挨拶に続いて、次の6つが話題として提供された。1. 機能性高分子材料—DSCによる分離膜の細孔径分布の測定—(東レリサーチセ、石切山一彦)、2. 複合材料—ポリイミド系分子複合材料の製造およびエポキシ硬化過程の研究—(東大、三田達)、3. 新金属材料—DSCによる合金の材質評価—(東北大、大島民夫)、4. セラミックス超伝導体(1)—生成過程の熱分析—(ダイセル、小沢丈夫)、5. セラミックス超伝導体(2)—TGによる酸素不定比量の測定—(東大、長谷川哲也)、6. セラミックス超伝導体(3)—比熱容量測定からの知見—(東工大、阿竹徹)。これらは、協原企画幹事とご相談しながら決めさせていただいたものであるが、手前味噌ながら、新材料の名に恥じないテーマ選択と話題提供者陣を感じ取っていただけよう。

個別の話題に触れることは紙面の都合で割愛させていただくが、いずれの話も内容は濃く、さながら、熱分析をだし(?)にして新材料そのもののホットな講義を聴かせていただいているような勿体無い気分であった。今、当日の録音テープを回してみても、さらにその感を強くしている次第である。惜しむらくは、資料がそろっていないこと。これは、ワークショップの運営方針として、資料の配布は話題提供者の自由としてきたことから当然の

ことではあるが、毎回興味深いお話しに接するにつけて、資料集を手にしたいの欲が出て来る。労力や費用面のこともあろうが、今後問題提起しておきたい。中国科学院大連化学物理研究所から、今回の要旨集の送付を希望する旨の手紙が学会事務局に届いていることも、ついでに紹介させていただく。

質疑・討論は勿論のこと、ワークショップならではの飛入りの話題提供も非常に活発であった。後者の中から、OHPを使用したもののみを発表順に紹介すると、いずれも酸化物超伝導体の熱分析に関するもので、ランタン系(松下電器, 和田隆博氏)、ビスマス系(三菱化成, 遠藤穂積氏)、イットリウム系(三井金属, 葉山忠徳氏)、TG-MS測定(島津製作所, 沖野孝之氏)の4件であった。やはり、新材料の中でも、酸化物超伝導体の関心度は依然として別格の感がある。

このように議論白熱で、会の終了が予定より1時間近くもオーバーしてしまったが、会場満席の64名の参加者

を得て、盛況裡に会を閉じることが出来て大変有難く思っている。ひとえに皆様のご協力のお陰である。手弁当で駆けつけてくださった話題提供者の方々、ご熱心な質疑・討論や飛入りの話題提供下さった参加者の皆様、閉めのご挨拶をいただいた平野賢一先生(東北大)、学会企画幹事で進行係も務めて下さった脇原将孝先生(東工大)、同市原祥次氏(三菱油化)の皆さまに心より感謝申上げる次第である。平野先生には、熱分析の持つマクロ性の効用に自信を持ち、もっとこれをPRしては、とこれからのグループ活動にとっても勇気付けられるお言葉をいただいた。

会館内で行なわれた懇親会にも、昼の出席者の4割強の24名の参加者を得て、新材料や熱分析についての議論が伯仲し、昼の熱気がそのままビールの席にまで持越された感があった。会館から京都駅に向う途中では、祇園囃しのコンチキチンが快く耳に響いてきた。

『熱測定』編集委員会

(委員長)高橋洋一

(編集委員)東原秀和, 寺井隆幸, 畠山立子, 馬越 淳, 松井恒雄, 松尾隆祐, 横川晴美

(地域編集委員)

高見沢熾一郎, 坂本尚史, 松下和正, 古市隆三郎, 寺本芳彦

熱測定 Vol. 15, No. 4, 1988 昭和63年10月25日印刷
昭和52年5月27日 第4種 昭和63年10月30日発行
郵便物(学術刊行物)認可

発行人 日本熱測定学会 矢 沢 彬

〒113 東京都文京区湯島2-16-13 齊藤ビル
電話 03-815-8514 振替 東京9-110303